

ジェフリー・ポール・ベイリス

『帝国の「余白」で——戦前・戦中期の日本における部落と朝鮮のアイデンティティ』

Jeffrey Paul Bayliss, *On the Margins of Empire: Buraku and Korean Identity in Prewar and Wartime Japan.*

青野正明

著者は二〇〇三年にハーバード大学から歴史学の博士学位を得し、現在は米国コネチカット州にあるトリニティ・カレッジ (Trinity College) にアソシエイト・プロフェッサーとして勤務している (同校HPのプロフィールによる)。日本での長年にわたる生活経験を土台に、さらに二度にわたる日本滞在で著者がおこなった研究・調査活動や、博士課程での研鑽が結実して、本書ができたものとは私は想像している。

まず、本書のタイトルにあるマージン (margin) を見て思いつくのは、ポストコロニアル理論で用いられる「サバルタン (subaltern)」という概念である。確かに本書はこの概念を下敷きに、それが意味する周縁化され抑圧された人々を研究対象にしていることが確認できる。もう少し具体的にいえば、本書はマージンに

追いやられた「部落民 (burakumin)」と「朝鮮人 (Koreans)」という二つのマイノリティを研究対象に設定し、両者のアイデンティティの関係を戦前・戦中期を通じて分析している。

なお本書の用語の翻訳に際して、本書のタイトルにある「margin」の訳語として周縁化された場という意味合いを出すべくかもしれないが、それに近い語ですでに概念化されている「周縁」や「周辺」を用いることはしないで、磯前順一 (国際日本文化研究センター) などの用例に倣い「余白」を当てることにした。それからアイデンティティ (identity) に関しては、本書評では本書全体を貫く用法に合わせて「主体性」という意味でこの語を使っている。

では内容に移って、著者はサバルタン住民としての二グループ



Harvard University Asia Center, 2013

の比較を試みた意図を次のように説明している。すなわち、二つのマイノリティ共同体の間に顕著に見られる、日本社会での社会経済的な位置とマジョリティから排斥される度合いという対比がある。この対比を考慮した場合、部落と朝鮮が経た周縁化の経験およびそれに対する様々なレベルでの反応を比較し、両者の支配・統合を企図した政策もその比較に並置することが必要だと著者は考えたようである。このような背景から、第七章で著者は日本が一九四五年に敗戦するまでの四半世紀の期間において、二つのマイノリティのメンバーがお互いをどのように見て、どのように影響し合ったのかを探索したという（p.11）。

まず構成を通じて本書の全体像を示そう。

序章

第一章 近代性と周縁化——明治期日本における部落民と朝鮮人の描写

鮮人の描写

第二章 初期における部落民と朝鮮人の反応——「余白」から見る近代性と帝国

第三章 一九二〇年代におけるマイノリティとマイノリティ問題——国家と帝国への脅威、そして自由主義的な対応

対応

第四章 「帝国デモクラシー」期におけるマイノリティ行動主

義とアイデンティティの対立

第五章 日本の「新体制」における「マイノリティ問題」——国家のマイノリティ政策と戦争動員

第六章 国家危機時におけるマイノリティ——動員と戦時下の部落民と朝鮮人

第七章 マイノリティ間の関係（一九二〇～四五年）——運動と共同体

終章 偏見、政策、そして帝国の「余白」における近接

次はこの構成の流れを概略したうえで、私なりの観点で本書から論点を見いだしてみようと思う。流れとしては、著者は主に三つの時期に分けて、結果的に二つのマイノリティ間の関係を描こうとしていたと考えられる。概観するならば、まず明治初期における近代化と周縁化およびそれらへの両者の反応が叙述されている。国民国家と帝国の中では天皇の臣民すべてが、市民という単なる法的な事実以上に、彼らのアイデンティティに対するより深くて固い絆を共有することが求められていた。そのことを背景に、国家が両者を国民国家および帝国の視野の中で統合しようとしたために、朝鮮と部落のアイデンティティが理想化された日本人から逸脱したものに描かれたと説明する（p.76）。

次に、二つ目の時期は一九二〇年代の「帝国デモクラシー

（Imperial Democracy）」期で、両者の運動の組織化とそれに並行するアイデンティティ対立が考察されている。三つ目の時期は一九三〇年代に入ってからで、戦争動員政策とアイデンティティ対立の顕在化としてまとめられるだろう。二つ目と三つ目の時期の両マイノリティ間における関係については、改めて第七章で整理・考察されている。やはり、前述したように二つのマイノリティを比較することで両者間の関係を描くことが、本書の最大の目的であることを改めて確認することができる。

後者の二つの時期における成果を概観することにもつながるため、次は方法論の面で私なりに本書から見いだした論点を二つあげてみよう。それらは、二つ目の時期を説明するために用いた「帝国デモクラシー」という日本では馴染みのない概念と、彼らサルタン住民の声を聞くことの試みとしてアイデンティティの関係性を論じた点である。

著者がハーバード大学で師事したアンドリュース・ゴードン（Andrew Gordon）の「帝国デモクラシー」という概念を用いることで、本書は二つのマイノリティにおける運動の性格付けとその限界を際立たせることに成功したといえよう。

この「帝国デモクラシー」は第一次世界大戦後に成立した中産階級の党派による支配の下で展開したという。当時の労働・社会運動は、組織化された抵抗から得る「帝国デモクラシー」の制度

に対するイデオロギー的な批評により鼓舞され、またそのような抵抗的な文化の一部となっていた。最もラディカルな表現をすれば、私有財産権、帝国の正統性、そして天皇制の必要性のような「帝国デモクラシー」の根本的な教義に対して、この抵抗的な文化は挑戦的であった。しかしながらそれ以上の頻度で、この時期の大衆的な政治・社会運動は上記のような問題に直面したなら両面価値的にならざるを得ない。この両義性により抵抗的な文化が「帝国デモクラシー」にも加担することになり、結果的にはそれに包摂されていくのであった（pp.166-67）。

このような「帝国デモクラシー」概念を用いたマイノリティ行動主義とアイデンティティの両義性の分析を踏み台にして、本書は両者におけるアイデンティティの複雑な関係性を提示する次のステージへと議論を展開し、その分析が可能となったといえる。

マイノリティ間のアイデンティティの関係性について、わかりやすい要約の一つと思われる部分を翻訳して次に引用しよう。これは著者がサルタン住民の声を聞き取ろうとした努力の結果のほんの一部分であることを断っておく。

二十世紀前半における朝鮮人と部落民の関係は、様々な要因に対する対応の中で形づくられ失敗に終わった。それら要因は、国家、帝国、そしてマジョリティの文化の中に入ること

を熱望した両マイノリティの位置と何らかの形で関わっている。世界観としての帝国の影響は、水平社の指導者たちが朝鮮人活動家の苦境と熱望を理解したり同情したりできた程度に、ひたすら限られたものであった。朴春琴〔親日融和団体である相愛会の指導者＝訳者〕のような朝鮮人が発した朝鮮人差別への批評は、アジアにおける日本の使命にともなう部落差別の問題を水平社が批判したことに共鳴するかもしれない。だが、マジヨリティの悪行を訴えるために互いが手をつなぐことで反体制的な態度が露わになることを避けたいという願望と、一方のマイノリティが戦争支援をする動機に対して抱いた疑念により、両者は差別に対抗する朝鮮・部落の「共同戦線」の誕生を回避してしまつた。(p. 377)

最後に本書から得た知見をもとに、私がさらに知りたいと思つたことを課題として提示してみる。本書は、国体観念にもとづく日本の国民教化において、部落民は天照大神に連なる日本臣民として想定されていなかったという立場を取っていると理解した。なぜなら朝鮮人と部落民をマイノリティとして国民統合の「余白」の位置に並置しているからである。しかし、国家としては両者の「余白」内での位置関係がより重要であり、排除・包摂に関して異なる認識があつたとすれば、両者に対する政策や各々のア

イデンティティに関する理解も変わってくるのではないかという疑問をもつた。つまり、読者のひとりとして排除・包摂の議論にまで踏み込んだ考察を読みたいということである。

これに関連して、一九二〇年代の日本において推進された国民教化、つまり国民国家の「公定ナシヨナリズム (official nationalism)」の内容は単一民族主義的ナシヨナリズムであつた。それに沿つた朝鮮人の「同化」とは同祖論を根拠とする国民意識の強制で、私は根拠自体が矛盾していたと考えている。だが一九三〇年代に入り、満洲事変後の帝国日本の拡張期においては、帝国主義的な国民意識が重なつた重層状態へと移行したと私は理解している。新たに覆い被さつてきた内容は多民族帝国主義的ナシヨナリズムと呼ぶべきもので、たとえば植民地朝鮮では日本人を頂点とする帝国臣民の序列の中に朝鮮人が組み込まれていた(拙著『帝国神道の形成——植民地朝鮮と国家神道の論理』岩波書店、二〇一五年、第三章を参照)。

このような国民国家成立期から帝国主義期に至るまでの国民教化において、国家が想定したナシヨナリズムの変遷と本書で描かれた二つのマイノリティのアイデンティティを重ね合わせてみると、本書で扱つた「融和」「同化」といった排除・包摂の両義的な概念をめぐる両アイデンティティの複雑な関係性に、新たな発見が加わるのではないだろうか。そのことを期待したいと思う。